

平成22年 5月 31日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20700501
 研究課題名（和文） ナショナリズムと身体政治学—ハワイ日系人のベースボールを事例として
 研究課題名（英文） Nationalism and the Political Body: The Case of Hawai 'i' s Second-generation Japanese American Baseball Players
 研究代表者
 森 仁志（MORI SATOSHI）
 工学院大学 工学部 講師
 研究者番号：20458988

研究成果の概要（和文）：本研究では、野球を实践するハワイ日系二世の政治的身体を事例として、彼らのアイデンティティの形成プロセスに関して考察に取り組んだ。フィールドワークでは、主に第二次世界大戦前後の時期に太平洋を跨いでプレーした二世選手に関する資料収集と聞き取り調査を実施し、具体的には、日本・ハワイ・米本土の新聞、雑誌、書籍、個人的な手記、ライフヒストリー資料、パンフレット等の史資料を包括的に収集した。考察では、二世選手が彼我（ハワイ・日本・米本土）のプレー・スタイルの模倣を通じて、自己と他者の同一化を志向しつつも、同時に微妙なズレと差異が（再）生産されるなかで、ナショナルあるいはエスニックな水準でいかなるアイデンティフィケーションを实践したのかについて論じた。本調査の一部は、すでに学会・研究会で発表しており、今後は学界のみならず、一般読者向けの書籍で成果を公開することを予定している。

研究成果の概要（英文）： This research considers the political body of the second-generation Japanese Hawaiians active in the baseball scene and the processes that went into forming their identities. In my fieldwork, I collected materials relating to these second-generation players who played in areas across the Pacific Ocean during the Second World War. More specifically, I have made a comprehensive collection of historical materials such as newspapers, magazines, books, personal notes, life stories, and pamphlets from Japan, Hawaii, and the US mainland. On considering the collected materials, I discussed the extent to which the second-generation players aspire to blend in by emulating opposing playing styles (Hawaii, Japan, and the US mainland), although retaining their national or ethnic individuality and simultaneously (re)producing subtle variations and differences. Part of this research has already been presented at academic conferences and seminars; in the future, I intend to publish the results in a book for the general public rather than only for the academic community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ科学

キーワード：スポーツ文化人類学

1. 研究開始当初の背景

申請者は、アメリカ合衆国ハワイ州における日系人のエスニシティに関して、2002年10月から2004年3月にかけて約一年半に及ぶフィールドワークを実施するなど継続的に研究を行ってきた。とりわけ、ハワイの若い世代の日系人を対象として、若者たち個人の生きられた経験に接近することにより、特定の文脈ごとにパフォーマンスに構築されるエスニシティの動態についての民族誌的な考察を試みてきた。この成果は、東京大学大学院総合文化研究科提出の博士論文「多民族社会ハワイにおけるジャパニーズのエスニシティに関する民族誌的研究」（2006）にまとめた。また、2008年8月には、同論文を加筆修正し、『境界の民族誌』（明石書店）を出版した。

ここまでの研究調査の結果を踏まえて、取り組むべき課題を整理すると以下となった。

(1) 非二項対立的なアイデンティティの生成プロセスに関する包括的理解

エスニックな水準でパフォーマンスに構築される「私たち」対「彼ら」という構図は、現実の日常生活では、人種、ナショナリティ、ジェンダー、セクシュアリティといった諸要素を完全に無視したものではありえず、それはむしろ、各々の要素をめぐる複雑な包摂と排除のプロセスを伴って立ち現れてくるものである。むしろ、こうした単純な二項対立的構図に収まりきれないアイデンティティの生成プロセスを理解するためには、複合的な要素が交錯した中で立ち現れてくる「私たち」意識を、それが生成する文脈ごとにより包括的に捉えなおし考察することが必要不可欠となる。

(2) アイデンティティの根拠として語られる身体の政治性に関する分析

多民族間の文化混雑が進展するハワイでは、エスニシティの根拠として、境界の曖昧化する「文化」ではなく、「身体的特徴」が強調される傾向にある。そして身体は、エスニシティはもちろん、人種、ナショナリティ、ジェンダー、セクシュアリティなどの諸要素をめぐる言説の主要な参照項であり、故に、それらの複数のアイデンティティが複合的に交錯しつつ同時的に生起する根幹的な政治アリーナともなっている。このため、非二

項対立的なアイデンティティの分析に際して、身体の政治性に関する考察は避けて通ることはできない重要な課題となる。

以上の問題意識を踏まえ、2007年度より継続して、複数のアイデンティティの交差点としての政治的身体に焦点をおいた研究を進めてきた。具体的には、アメリカでナショナリズムが高揚した第二次世界大戦前後の時期に、ハワイでベースボールに熱中した日系二世たちに注目してきた。第二次世界大戦開戦前に、日米関係が悪化する中で、日系人が全人口の40%を占めていたハワイでは、様々な日系文化が弾圧される一方で、ベースボールはアメリカ的精神を「身につける」ものとして白人支配層からお墨付きの活動となっていた。ただし、こうした支配者集団によるナショナリズムの身体化の戦略は、その意図とは裏腹に、日系人にマイノリティとしての人種的民族的な自己（の身体）を明確に意識させるものでもあったともいえる。そこで本研究では、ベースボールを実践する日系二世の政治的身体を事例として、ナショナルな水準を意識しつつも、ナショナリティという所与の社会的アイデンティティに回収され得えない複合的なアイデンティティの生成プロセスに関して、具体的に考察を行うことにした。

2. 研究の目的

(1) 非二項対立的なアイデンティティについての身体文化論的考察

1928年にカリフォルニア州ストックトンのベースボールチーム「大和軍」が行った日本遠征に関する資料収集を日本国内で進める。とりわけハワイのマッキンレー高校からエキストラ・プレーヤーとして参加した日系二世のヘンリー・忠志・若林の「日本人離れた身体」へ向けられた日本人側からのまなざしに注目して新聞雑誌等の資料を収集する。これにより、彼がアメリカ人として日本に遠征し、「大和軍」の一員として日本人チーム（観客も含む）と相対し、また同時に、チーム内ではハワイ出身の自己とアメリカ本土からの日系人（あるいは同チームに特別参加の白人選手）チームメイトとの差異を認識する（させられる）という状況の中で、いかなる自己意識を形成していったのかに焦

点を当て考察を行う。本研究では、より多角的な視点から考察を深めるために、彼自身の発言や手記などの調査はもちろん、ハワイやアメリカ人側からのまなざしについての調査も追加することにより、ナショナルな水準に回収されえない若林個人の交錯したアイデンティティの諸相について具体的に明らかにする。

(2) 「アウター」ナショナルなアイデンティティに関する考察

ハワイ出身で第二次世界大戦前後に阪神（大阪）タイガースで活躍したヘンリー・忠志・若林、カイザー・義雄・田中、正男・古川（以上マッキンレー高卒）、ジミー・文人・堀尾（マウイ高卒）、敏夫・亀田（ミッドパシフィック高卒）らに注目することにより、ベースボールをハワイではじめ、それをプレーすることを通じて日本に旅し、日本人と出会い、そして定住する国を（日米の二重国籍という立場を利用して）自分の意思で選択・変更する中で、「私」と「国家」の必然的な結びつきが揺さぶられる、つまりスポーツする身体が、（ナショナリズムに絡め取られるのではなく）ナショナルなものを脱臼し乗り越えていく可能性について考察する。

3. 研究の方法

本研究では、アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島を調査地として、第二次世界大戦前後の時期に、ハワイでベースボールに熱中した日系二世に関する資料収集と聞き取り調査を実施した。また、国境を越えた移動を伴う諸活動にも焦点を当てるため、彼らの日本遠征・滞在に関連した出来事についても調査を行った。

2008年度には資料収集を中心に、2009年度は初年度に得た資料を手がかりとして関係者に対する聞き取り調査を行った。現地ハワイには、初年度に計21日間、二年目は計18日間滞在して調査を実施するとともに、日本国内でも野球体育博物館や各大学図書館を中心に関連資料を集めた。

4. 研究成果

本研究では、当初予定していた資料収集が順調に進んだために、調査の対象年を順次拡大してより包括的な資料収集に取り組んだ。これまでに得た資料を歴史的な出来事順に整理すると以下となる。

(1) 1880年代以前

○ハワイ野球の「起源」に関する主な資料

・アレクサンダー・カートライト関連資料
概略：一般的に「野球の父」と称されるカートライトは、ニューヨークで野球を「発明」した（とされる）年からわずか四年後の1849年にハワイに渡り、そこで生涯をすごした。このため彼は、（真偽のほどは別として）「ハワイ野球」の父としても知られている。

成果：カートライト関連諸施設の訪問や地元博物館や公文書館などで保存されている資料の閲覧・収集。

・プナホウ関連資料

概略：プナホウ（宣教師の子弟の教育のために設立された学校）では、19世紀中頃から学生の間で盛んに野球が行われていたという記録が残されており、同校を基点としたハワイとアメリカ本土の人的な交流（学生・教員）によって、本土から野球に関する最新の情報がもたらされていた。

成果：プナホウの卒業記念集、卒業生による回想録、パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー紙の記事、関連書籍・論文の収集。

(2) 1890年代～1910年代

○ハワイの日系人野球の「起源」に関する主な資料

・エクセルシア関連資料

概略：ホノルル日本人小学校に通う寄宿生らによる日系人「初」の（とされる）野球チーム。

成果：ホノルル日本人小学校設立者の奥村多喜衛による出版物（手記・寄宿舎案内パンフレット等）、関連書籍の収集。

・朝日関連資料

概略：ホノルルのダウンタウン近辺に住む日系二世の少年達が設立したチームで、民族別のリーグ戦に加入し、後に日系人代表チームとしての地位を確立。

成果：チーム設立者野田義角の手記・写真等の収集・同親族への聞き取り調査、日布時事、ハワイ報知紙の記事、関連書籍等の収集。

・プランテーション野球関連資料

概略：プランテーションの白人経営者は、労働者の不満の捌け口として様々な娯楽を提供した。なかでも人気を博した野球は、プランテーション別のチームや民族別のリーグも形成された。

成果：ライフヒストリー資料、関連出版物、書籍、ハワイアン・ガゼットの記事等の収集。

・日布野球交流関連資料

概略：1905年には早稲田大学野球部がアメリカ遠征の途中にハワイに立ち寄り、1907年には慶應大学の招聘によってハワイからセントルイスチームが来日、翌年には返礼として慶應がハワイに招かれるなど、日布の野球交流がこの時期に開始された。また、1915年には、日系二世チームの朝日による日本遠征が実現している。

成果：早稲田・慶應大学各野球部史、慶應選手による「ハワイ遠征日記」、報知新聞等への学生選手の遠征記の寄稿、パンフィック・コマーシャル・アドバイザー、サンデー・アドバイザー、ハワイ報知新聞、国民新聞、時事新報等の新聞記事、関連雑誌の記事等の収集。

(3)1920～1940年代

○第二次世界大戦前から戦中に日本のプロ野球界で活躍したハワイ出身二世選手に関する主な資料

・ヘンリー・忠志・若林関連資料

概略：ハワイ出身の日系二世の若林は、アメリカ本土の日系チーム「大和」の助っ人として来日したことをきっかけに、法政大学に入学して六大学野球で活躍。その後、日本プロ野球の設立時から日系二世選手のさきがけとして阪神タイガースで活躍し、監督まで務めた。

成果：若林個人に関する資料としては、若林発行の雑誌『ボールフレンド』での本人の論説記事、『野球界』等の野球雑誌・新聞記事でのインタビュー、関連書籍等の資料を収集。その他、彼が直接的間接的に巻き込まれた出来事（六大学による外国人参加反対議決書や、戦中の外国人選手の排除を主張する言説等）に関する資料収集。また、若林の後を追って来日した二世選手のリスト及び関連資料の収集。

・米軍野球関連資料

概略：ハワイで野球をプレーした日系二世の中には、第二次世界大戦中にアメリカ軍に志願し、軍のチームに所属して野球を続けたものもいた。

成果：ライフヒストリー資料、写真、関連冊子・書籍等の収集。

・米布野球交流関連資料

概略：第二次世界大戦によって日布の野球交流が途絶える一方で、太平洋の軍事拠点ハワイには、米本土で活躍するメジャーリーガーが軍役のために次々と来布

し、地元の日系二世チームなどと交流戦を行った。

成果：ライフヒストリー資料、写真、関連冊子・書籍等の資料の収集。

(4)1950年代～

○第二次世界大戦後に日本のプロ野球で活躍したハワイ出身の日系二世選手に関する主な資料

・ウォーリー・与那嶺関連資料

概略：与那嶺は第二次世界大戦後初のアメリカ国籍のプロ野球選手として活躍し、その後続々と来日するハワイ出身の日系二世選手のさきがけとなった。

成果：ライフヒストリー資料、野球界、ベースボールマガジン等の野球雑誌記事、関連新聞記事・書籍等の収集。また、与那嶺の後を追って来日した日系二世選手のリスト及び関連資料の収集。

・日米野球交流関連記事の収集

概略：1949年にアメリカのマイナーリーグのサンフランシスコ・シールズが来日して以降、メジャーリーグのチームが続々と来日して日本のプロ野球チームとの交流戦を行った。

成果：野球界、ベースボールマガジン等の野球雑誌での日米選手のインタビュー記事、関連書籍関連新聞記事・書籍等の収集。

総括

「敵」と「味方」に分かれて勝ち負けを競う野球は、本質的に「私たち」対「彼ら」という「分断」によって成り立つスポーツだと捉えることができる。しかし、本研究の通時的調査により明らかになったのは、二項対立的な分断によって立ち現れる彼我の境界が、一方ではその境界の顕在性ゆえに意識的な交流すなわち「つながり」を生み出してきたという歴史的なパラドクスである。

ハワイ出身の日系二世を仲介者とした日布米の野球交流において、当初、手本（オリジナル）とされたメジャーリーガーのスタイルは日系二世や日本人選手によって盛んに模倣（コピー）されるが、時代の変遷とともに、逆にオリジナルがコピーからヒントを得てそれをコピーするというような循環のなかで、もはやその外部にオリジナルを見定めることさえ不可能となる錯綜した現実が出現する。自己（のプレー・スタイル）と他者は完全に同一化することはないにせよ、模倣の繰り返しのによって、自他を二項対立的に切り離すことも困難となる。にもかかわらず、それぞれの時代ごとに、通時的な模倣と同一

化の実践は等閑視され、一方で、プレー・スタイルをめぐる自他の二項対立的な語りは再生産され続けてきた。そこで本調査のタイムスパンをもって日布米の野球交流史を通時的に描き出すことにより（本調査の成果の一部は、すでに昨年度の学会・研究会等で発表を行っている）、スポーツをめぐる彼我の二項対立的な語りを改めて問い直すことができると考えている（これを実現するために書籍化に取り組んでおり、6章構成で3章分まで執筆済）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計2件）

- ① 森仁志、ベースボール／野球を实践する身体とアイデンティティ、ハワイ研究会第23回研究会、2008年11月16日、東京大学
- ② 森仁志、越境する身体／技法、スポーツ人類学会第10回研究大会、2009年3月29日、早稲田大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 仁志 (MORI SATOSHI)
工学院大学・工学部・講師
研究者番号：20458988